

3つのポリシーの改正ガイドライン

関西国際大学

2016.3.25

現在、本学ではディプロマ・ポリシー (DP 卒業認定・学位授与の方針)、カリキュラム・ポリシー (CP 教育課程編成の方針)、アドミッション・ポリシー (AP 入学者受け入れの方針) の3つのポリシーの見直し作業に取り組んでいる。

これらのポリシーの作成に際しては、下記のことを参照されたい。

1. 基本となるのは「学則」である

第1章 総 則

(目的)

第1条 関西国際大学(以下、「本学」という。)は、教育基本法及び学校教育法に基づき、グローバルな視野に立った教養を基礎とする専門的知識・技術を修得し、国際社会において活躍できる人材を育成することを目的とする。

(教育目標)

第1条の2 前条に規定する目的を実現するために、本学は次の各号に定める力・資質を修得・涵養し、総合的に活用できる人材を養成することを教育目標とする。

- (1) 自律できる力
- (2) 社会に貢献できる力
- (3) 心豊かな世界市民としての資質
- (4) 問題解決能力
- (5) コミュニケーション能力
- (6) 専門的知識・技術

2 前項を踏まえた学部・学科の教育目標は、各学部の学部規則で定める。

3 本条に規定する教育目標の達成方法及び評価方法は、別に

定める

2. アセスメント可能なポリシーの作成を行う

- ・3つのポリシーとりわけ DP 作成にあたっては、検証・測定に必要な「観点 standard」と「尺度 criteria」を考える。
- ・評価は多元的に測定することを考えた設計にし、定量的尺度や定性的尺度を適宜組み合わせるようにする(評価プラン)
- Cf. 定量化しやすい評価 (国試合格率、標準化テスト・スコア等)

定量化しにくいパフォーマンス評価 (ルーブリックを活用した学修成果
ポートフォリオ、フォーカス・グループ・インタビュー等) の評価や行動評価、e

CP を満たした教育が行われている？

DP を満たした学修成果が上がっている？

DP や CP に必要な条件を測る選考を行う AP になっているか？

AP が必要な能力や条件を測ることができる内容や表現になっているか

3. 3 ポリシーの作成手順

・全体の流れとしては DP→CP→AP の順に作成する。

・全学ポリシー（ガイドライン）を参考にしつつ、学位プログラムの領域の特性（専門性、資格・免許、想定する進路等）を勘案し、学位プログラム（授与する学位、学科）ごとに当該学部・学科で3つのポリシー案を作成し、カリキュラム委員会及び評価センターの意見を参考にし、教授会で審議を行い、学長がこれを決定する。作成にあたっては、全学ポリシーと学位プログラムポリシーの整合性に留意する。

・以下に作成手順を示す

1) 全学 DP（学位授与の方針の基本的考え方、方針）

学則、KUIS 学修ベンチマーク、学部規則、（+学士力、社会人基礎力、就職

基礎力、コンピテンシー等）を参考に、基本的・共通のコンセプト、盛り込むべき事項、キーワードを加える。学力の3要素がその中に盛り込まれていることは必要条件である



1)' 学位プログラムの DP（学部・学科単位、学位毎に全学 DP をカスタマイズして作成する）

全学 DP を参照し、基本的・共通のコンセプトを盛り込みつつ、学位の特徴に基づき学修の到達目標をアセスメント可能である表現で明確に定める。学力の3要素がその中に盛り込まれていることは必要条件である（3つの柱を立てるということと必ずしも同義ではない）

2) 全学 CP

教育内容

DP の達成を可能にする教育内容になっているか

教育課程としての整合性を確保し、体系的・系統性に基づく編成となること

cf. カリキュラム・マップ（整合性）、カリキュラム・ツリー（体系的・系統性）の活用

要卒単位数に過不足のない授業科目数であることを確認すること

教育方法

DP を達成するのに効果的な教育方法が定められているか

教育効果が上がりやすい教育環境の活用が盛り込まれているか

組織的な教育が実行できる仕組みが取り入れられているか



2)' 学位プログラムの CP

当該プログラム DP の達成を可能にする過不足のない内容になっているか

教育課程としての整合性、体系的・系統性の確認がなされているか

cf. カリキュラム・マップ（整合性）、カリキュラム・ツリー（体系的・系統性）

要卒単位数に過不足のない授業科目数となっているか

学位プログラム DP を達成するのに効果的な教育方法が用いられているか
教育効果が上がりやすい教育環境の活用が盛り込まれているか
組織的な教育が実行できる仕組みが取り入れられているか
教育内容について、その実施状況と効果についての検証方法が考慮されていること

3) 学位プログラム単位での AP (アドミッション・ポリシー)

「DP に示す能力を獲得するための学習・教育機会を明示した CP の授業科目群や要件を経験し、クリアしていくために最低限必要な入学時に求める資質・能力等（知識・技能・態度）の観点から AP の再検討」（川嶋 2015）し、具体的な測定可能な柱を確定する。



AP に整合的な入試方法の検討

Ex. 入学後必要とする基礎学力の内容を問う筆記試験

小授業を聞かせて、小論文を読んだ上での設問回答

集団面接



受け入れ単位の再検討（大括り v s 小単位）

4. 全学ポリシー作成についてのガイドライン

1) DP

- ①基本的方向性として、学則第 1 条の 2 に規定する KUIS 学修ベンチマークと学科の目標を融合させたものにすることが望ましい。
- ②KUIS 学修ベンチマークを学科の専門性にカスタマイズすることをめざす
- ③目標設定にあたっては、学力の 3 要素（(1)知識・技能、(2)思考力・判断力・表現力、(3)主体的に取り組む態度）が盛り込まれていること
- ④項目数は 4～6 項目程度が望ましい
- ⑤DP に記載される修得する能力・スキル・態度についての目標はアセスメント（測定・検証）が可能なものにし、同一項目に異なる次元のものが重複しないようにする
- ⑥文章表現は複文を避け、受験生、保護者、高校教員にも理解できるように心がける
- ⑦目標達成のアセスメントを行うことを考え、大学教育に対する社会からの期待、日本学術会議分野別参照基準、指定規則等の内容といった水準を念頭に置きつつ、過剰な理想論に走ることなく、学科の責任における達成可能性を考慮した表現をとること

2) CP

- ①教育内容は DP の達成を可能にする内容になっているか
- ②教育課程としての整合性、体系性、系統性の確認したものになっているか
cf. カリキュラム・マップ（整合性）、カリキュラム・ツリー（体系性・系統性）

要卒単位数に過不足のない授業科目数か

- ③教育方法は DP を達成するのに効果的なものが定められているか
- ④教育効果が上がりやすい教育環境の活用をすることが盛り込まれているか
- ⑤組織的な教育が実行できる仕組みが取り入れられているか
- ⑥全学共通の取り組みであっても、学位プログラム(学科)の特徴を過不足なく盛り込んでいるか
- ⑦学外者から見て理解可能な表現で書かれているか

3) アドミッション・ポリシー

①アドミッション・ポリシーには本学での学修に必要とされる知識、経験、能力、態度特性を具体的に箇条書きで作成する

①本学の教育方針、教育目標、教育内容、教育方法の在り方を理解、賛同し、本学での学修に意欲をもっている→自己申告書、面接

②課外活動やボランティア活動等を通じ、集団での活動経験があり、グループでの学習(グループワーク)に能動的に参加できる→調査書、自己申告書、面接

③「コミュニケーション能力の基礎を修めている」→「日本語①と英語②でのコミュニケーション能力」→「読み a、書き b、聞く c、話す d の 4 技能」

レベル設定は、英語であれば、外部テストを尺度とした「英検準 2 級(3 級?)」程度

④「生物としての人間についての基礎的理解」→ex.生物、化学の人体についての領域の知識(どう記述するかが問題)【看護】

⑤「社会、公民を通じて日本社会の直面する社会問題についての基礎的理解」少子高齢化、→ex.グローバル化についての文章を読んだ上での小論文を作成

【教育福祉、英語教育、経営、人間心理、】

4) アセスメントポリシー

アセスメントポリシーは、DP に定めた学修成果の測定を、いつ、どのように測定・検証するのかを定めた全学の方針である。具体的には、DP の達成状況の評価を学位プログラム単位で評価を行うことが中心であるが、全学や学生個人についての評価、及び CP や AP の実施状況や効果検証についての評価プランを含めることができる。

- ・基本的には、全学の教育目標の達成状況の検証、学位プログラム単位でのその検証を主たる対象とし、いつ、どのような方法とそれらの組み合わせで測定・評価(Assessment)し、総合的に第三者の検証を経てその達成状況を評価(Evaluation)するかの方針と手順を定める
- ・学生個人の達成度の評価方法についても、学生の成長と学修成果についてどのような方法で測定するかの方針を定める
- ・CP については、定められた教育内容や教育方法がどの程度実行されているかを確認し、それぞれの施策が学修成果の達成に効果があるかを測定し、評価する。